

31. マダラ *Gadus macrocephalus* Tilesius

図版13

英名 Pacific cod

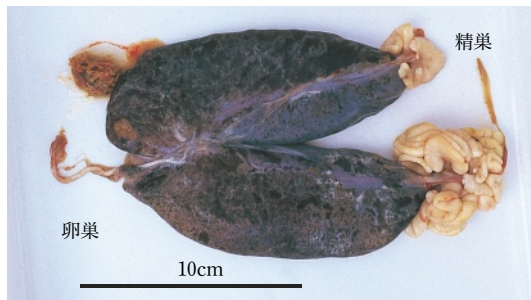
露名 тихоокеанская (восточная) треска

地方名(北海道) タラ、ポンタラ (小型魚)

漢字 真鱈、大口魚

アイヌ語名 エレクシ、エロクシ、ヘレクシ

【形態】 頭部が大きく、あごの下にひげが1本ある。上あごは下あごより前に出る。背びれが3つ、尻びれが2つというタラ科の特徴を持つ。全長*は



1 mあまりになる。体は全体的に灰色で、背部から体側にまだら模様があり、このことが和名の由来。消化管に通じない鰾*を持つ。

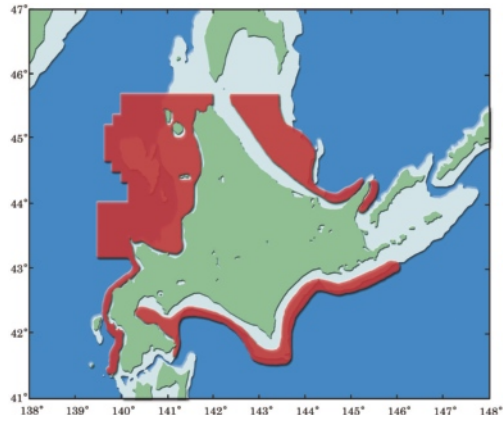
形態的には大西洋に分布するタイセイヨウダラ *Gadus morhua* Linnaeus とよく似ており、以前は同種*とする見解もあった。し

卵巣と精巣の両方が発達した珍しい生殖巣
(1999年3月、根室沖)

かし、産み出された卵の性質が兩種で異なることが明らかになり、現在は別種として扱われている。

マダラの若魚*はコマイに似るが、ひげの根本が黒いことでコマイと区別できる。

マダラの卵巣被膜は特徴的で、大型魚になると黒くなる。ただし、卵まで黒いわけではない。

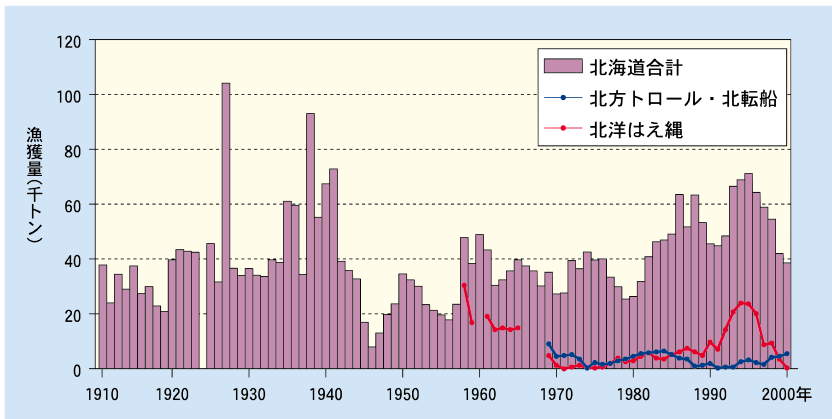


北海道におけるマダラの漁場

【生態】 北太平洋、朝鮮

半島周辺から北米サンタ・モニカ湾までの北緯34度以北の大陸棚*と大陸棚斜面域に広く分布する。海底付近を遊泳し、沿岸から水深550mの沖合まで生息している。冷水性で日本では北海道周辺に多く分布する。分布の南限は日本海側では島根県、太平洋側では茨城県である。生息水温は2～4℃とされているが、氷点下や10℃以上の所でも分布が確認されている。

マダラは一般に大きな回遊*はしないとされてきたが、青森県陸奥湾で産卵魚に標識*を付け放流したところ、春から秋の索餌*期には北海道東部の太平洋へ分布範囲を広げ、冬の産卵期には再び陸奥湾へ戻ってくるということが明らかになった。その移動距離は数百kmに及び、少なくとも陸奥湾の群はマダラと



北海道におけるマダラの漁獲量

(北海道合計は、北方トロール・北転船、北洋はえ縄を含む)

しては大きく移動する群と考えられている。ただし、この群は日本海のマダラとは交流が少なく、それぞれが独立した系群*とされている。また、太平洋と日本海のそれぞれに、根ダラと沖ダラと呼ばれる体型が異なる2つのタイプが存在するという報告もある。根ダラは沖ダラより細長く、岩礁^{がんしょう}付近にすむ。

マダラは、若干の例外はあるが比較的移動範囲が小さく、ほかの集団との交流が非常に少ないため、マダラ資源は漁獲の影響を受けやすいといえる。

産卵は1年に1回、12月～翌3月に比較的浅い沿岸域に回遊して行われる。産卵期は南で早く北ほど遅い傾向がある。生殖巣の重量は雌雄ともに体重の20%以上になり、雌は180万～400万粒の卵を一度に産み出す。卵の直径は1mm前後。産み出された卵は弱い粘着性があり、海底へと沈む。この点が分離浮性卵*のタイセイヨウダラと異なる。

ふ化した仔魚^{しぎよ}*は沿岸域で浮遊生活を送るが、成長とともに夏から秋にかけて水深30～50mの海底付近で生活するようになる。マダラは日本周辺のタラ類のなかで最も成長が速く、大きくなる。満1歳で体長*10～20cm、満2歳で30cm程度になり、体長1m、体重16kgを超える大物もみられる。寿命は12年以上。生物学的最小形*は、日本海北部の武蔵堆*^{むさしだい}海域の場合、雄で体長42cm、雌で45cmであった。

成魚*は口が大きく何でも食べる大食漢で知られ、「たらふく食べる」に「鱈^{たら}腹」の字を当てるほどである。実際に何を食べているのか、日本海で漁獲されたマダラ850個体の胃袋を調べたところ、魚類が39%と最も多く、次いでホッコクアカエビなどの甲殻類が19%が多かった。幼魚*の主な餌生物はカイアシ類*などの動物プランクトンである。